

台風前後の技術対策について

台風第10号は日本海を北上し、17日未明までに温帯低気圧に変わる見込みですが、16日夕方～17日にかけて大雨と暴風に対して十分注意が必要です。

北海道では24時間降水量で多いところで200～300mmの大雨となることが予想されるため、事前に備えをしましょう。

○浸冠水の恐れがある施設やほ場では、排水路の点検や速やかに排水できるような対策を講じましょう。

○ハウスバンド、アンカー、ビニールの破損部分の点検を行い、適宜、ハウス・施設を補強しましょう。

【水稲】

浸水により泥砂の流入したほ場は、退水後に溝きりを行い、収穫作業に支障のないように努める。また、「いもち病」の発生が心配されるので、排水一週間後を目安に病斑の確認を行う。発生が確認された場合の防除は、農協、普及センターに相談する。

【畑作】

(豆類) 菌核病・灰色かび病、小豆・菜豆では炭そ病などの発病が助長されるので、防除基準に準拠して薬剤散布を行う。

【園芸】

(全般) 付傷部分からの軟腐病菌の感染が高まる恐れがあるので、防除基準に準拠して薬剤散布を励行する。防除の際は薬剤の使用基準(収穫前日数)を確認する。

(たまねぎ) 浸冠水により軟腐病や貯蔵腐敗(りん片腐敗病・灰色腐敗病)が発生しやすくなるので、ほ場の表面排水対策を急ぎ、ほ場の乾燥を待って防除を実施する。

収穫前に罹病球を厳しく選別除去して製品への腐敗球の混入を避け、収穫後は雨が当たらないようにして風通しの良い場所での風乾をしっかりと行う。

腐敗球はほ場外に搬出して埋設処理等を行う。

(にんじん) 裂根以外にも土壌水分過多で、着色不良、軟腐病・根腐病の発生が多くなる。

傾斜ほ場では土壌流亡により、青首の発生が多くなるため、ほ場乾燥後に培土を行い、黒葉枯病防除を行う。

(かぼちゃ) 土壌過湿によって果皮のコルク化症状(ガンベ)の発生する恐れがあるので、溝切りなどで表面排水に努める。また、べと病や疫病が発生しやすい条件なので防除に努めたいので、収穫後はキュアリングを徹底して、腐敗果実を出荷しないようにする。

(果樹) 強風に備え、支柱の点検補強、ぶどう棚や垣根の点検補強を行う。

りんごのわい化樹や各種果樹の幼木は、支柱への結束状況を点検し、倒伏を防ぐ。

プルーンやブルーベリーなど収穫可能な品種は、速やかに収穫する。

【畜産】

- 1) 停電で搾乳が不可能な場合、牛舎への出入りは必要最小限にし、牛に搾乳刺激を与えない。給水制限すると同時に濃厚飼料の飼料給与は控える。
- 2) 通電後、直ちに搾乳する。ただし、前搾りを行い凝固物（通称ブツ）有無を確認し、罹患している場合は治療する。
- 3) 牛の体調を確認して、異常牛はすみやかに獣医師の診断を受ける。